

遺伝子組換えぶどうは果たして「進歩」といえるだろうか？

横山 弘和



横山 弘和 / よこやま ひろかず
1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュヴァリエ・デュ・タートヴァン(利き酒師)叙任。現在佐多商会業務室在籍。

ワインの専門誌『ワイン・スペクテーター』に、有名なワイン・ジャーナリストであるマット・クレマー氏(*)による寄稿文が掲載されました。表題は「未来との戦い(Fighting the Future)」。

遺伝子組換えぶどうの問題を含むワイン産業の「進歩」について問いを投げかけています。そこで今回は、「ソムリエの旅行記」をお休みして、ワイン業界においてぶどうを生産しワインを造る技術がどのように進歩したのか、そして遺伝子組換えぶどうをめぐる動きについて取り上げてみたいと思います。

何百年もの間たえまなく続いてきた現代ワインインダストリーと呼ばれる産業の進歩は、他の様々な産業と同じように、20世紀に入ってから発展の速度が急激に早まります。今振り返ってみますと、20世紀も最後の25年間に特に際立った発展がみられます。それはわが国の飲料事業にも大きな影響を与えました。日本人がワインと親しくなったのは“ついこの間”のことです。最初、国民1人当たりの年間ワイン消費量はわずかお猪口1杯でした。それが最近では、1人当たり2.5リットルにも達したと報じられています。

本来、良質なぶどうを育てるには、熟練した技術はもちろんのこと、運も必要としました。ぶどうが生育するほぼ100日間の天候が好都合なもので、運よく予定の時期に収穫ができることが条件だったからです。現在のように気象情報が行き届いていない時代、取り入れ直前の急激な天候の悪化は、一瞬にして1年間の労苦を無駄にしてしまいました。今では天候の変化を予報で察知し、早めに手を打つことも可能です。それがヴァンテージによるばらつきを抑え、年代による極端な品質の差を少なくしています。

技術面では、20年ほど前まではぶどう畑での労働はラバ(雄口バと雌馬との雑種)に頼らなくてはなりませんでした。現在では器械の導入により、動物ばかりか人手さえも少なくすむようになりました。枝の剪定、刈り込み、手入れ、葉除き、殺虫剤の散布、さらに摘み取りも器械が移動して取り入れられ、人件費の削減に大いに役立ち、ワインの生産コストを大幅に下げることになりました。数多くの新しい道具も使われ始め、工場内でも大きな変化が起きています。発酵、ろ過、熟成などの工程で、木製の桶や樽に替わってステンレス製のタンクが多く使われるようになりました。その結果、

ぶどうの発酵時の温度を完璧に調整でき、失敗することなく、衛生的で応用のきくワイン醸造が可能となりました。工場全体がコンピューター装置で制御されているワイナリーさえ存在するのです。

しかしなんといってもワイン造りに一番大事なものは、原料となるぶどうの品質です。畑に植えるぶどうの苗は果物として良質で、完全に健康でなくてはなりません。しかし、最近ワインの世界での「進歩」は原料のぶどうの品種改良にもおよび、遺伝子組換え問題が大きな話題となっています。

遺伝子組換えにより、病害虫や農薬などに強い性質を持たせた生物を総称して「遺伝子改変生物」といいます。生命科学の発展はめざましいものがあり、最近では遺伝子改変生物の国際取引も増え、欧米の企業は途上国で遺伝子改変生物の野外実験を行っています。しかし、それに伴って遺伝子改変生物が人の健康や生態系におよぼす影響が問題となってきました。そこで、生物種、生態系および遺伝子の多様性を保護するために1992年「生物多様性条約」が採択され、遺伝子改変生物が生態系に悪影響をおよぼさないよう、各国が一致協力する体制が築かれました。日本は翌年93年に批准しています。しかし、各国の政治的・経済的思惑が絡み、批准国の足並みが揃っているとはいえないのが現状のようです。

さて、冒頭でお伝えしたマット・クレマー氏の記事によりますと、遺伝子組換えぶどうの問題にもっとも率直な意見を表明したのが、フランス・ブルゴーニュ地方のワイン生産者たちでした。2000年7月、遺伝子改変生物に反対する宣言書が発表されました。それには、この地方でも有数の優れたワイン醸造家24人が署名し、この中にはドメヌ・ド・ラ・ロマネ・コンティのオベール・ド・ヴィレーヌ氏やメゾン・ルイ・ジャド社のピエール・アンリ・ガジェ社長の名前もあります。以下、マット・クレマー氏の記事を引用させていただきます。

*

この宣言書には「遺伝子組換えぶどうおよび遺伝子組換えぶどうを使用したワインは、ヨーロッパでの販売承認を未だ得ていない」が、研究は「特に遺伝子組換えイーストの分野で非常に進んでいる」とある。遺伝子組換えに相当するのは次のようなものだ。

・酵素、抗菌性物質、および品種特有のアロマを強める物質を



畑の中を移動しながらぶどうを収穫するharvest machine。

分泌するイースト

- ・ハマキムシに抵抗性のある台木
- ・うどんこ病、べと病、黄色ウイルス病、フィロキセラに対する抵抗性をもつぶどう品種

素晴らしい。フィロキセラが治るって？ まさにぶどう栽培家の夢ではないか。

ところが、そう簡単にはいかない。ブルゴーニュ人は土地との結びつきが強いことで知られている。だからこそ、あれだけ多くの小さなぶどう農家が畑を持ち根をはっている。そしてここで、世界でもっともセンシティブな赤ワインの原料となるぶどう、かのピノ・ノワールが栽培されている。

しかし、ブルゴーニュ人が「進歩」をこれほど懸念する理由はそれだけではない。実は1970年代、80年代に自慢のぶどう畑をだいにしにしかけた苦い経験があるのだ。

当時、研究者の意見に従って、ブルゴーニュのぶどう農家は、昔から受け継いできたたくさんのピノ・ノワールの株をほんのわずかな新しい株と交換した。これが間違いのもとだった。収穫は大量だったが、独特の香りがすっかり失われてしまった。また、専門家たちのアドバイスを取り入れて、収穫期のぶどうの腐敗を防ぐために新開発の腐敗防止剤をたっぷりとスプレーした。しかし、数年間使い続けた結果、この高価なスプレーは使い勝手はいいものの、効果はすっかり薄れてしまった。肥料をたくさんやるといいというのでやってみると、ぶどうの木は膨れ上がり、土壌はカリウム過多になった。除草剤と防カビ剤の使いすぎの結果、土壌は無菌室状態になった。

1990年代までに、ブルゴーニュのぶどう農家はこれは自殺行為だということに気付く。彼らは「進歩」に躍らされていたのだ。

なにより、ブルゴーニュは道徳を守ろうとする意識が強い。古い歴史を持ち、宗教が現代に息づく土地柄でもある。なんといってもカソリックの修道士と修道女が拓いた土地なのだ。今日のブルゴーニュ人も、何世紀も綿々として続くその強い絆を意識している。

科学者たちの太鼓判に乗せられ、新発明の道具の使いやすさに目をくらまされて、ブルゴーニュ人は一度は世界最高のぶどう畑の守護者としての節義を曲げてしまった。そして彼らはそのことを自覚している。



近代的なステンレス製タンク

これで、フランスでの遺伝子組換え原料をワインに使用することへの反対運動がブルゴーニュで始まった理由がお分かりだろう。ブルゴーニュでの議論は核心をついていた。2001年3月、フランスの他の地方のワイン醸造家たちもこの声に耳を傾けた。ブルゴーニュでの会議の後、Terre et Vin du Monde という組織が結成された。10年間の遺伝子組換え原料の使用一時停止の嘆願書に署名し、全国のぶどう農家、ワイン愛好家に支持を求めた。

さて、ここで問題だ。この動きは正しいものだろうか？ 普通にワインを楽しむ人々もこの大義のもとに参集一心の中だけでも一すべきだろうか？

筆者個人としての答えはイエスだ。遺伝子組換えにも未来はある。それは一部の人たちが主張するような「フランケンシュタインの未来」では必ずしもない。とはいえ、ブルゴーニュ人の「進歩」をめぐる最近の経験は、耳を貸すに値する戒めだろう。遺伝子組換え原料の使用一時停止嘆願書にサインしたブルゴーニュ人たちの言葉は痛烈だ。

「我々の職業の未来は、科学者、実業家、テクノクラートの影響や利益のもとで発展していくのではない。これが過去の経験が我々に与えた教訓である」

*

最後に、私が以前知り合った優れたワイン生産者から聞いた言葉に触れておきます。「自然で正直なワイン造りに近道はない」。私個人としては、ワイン産業の「進歩」は決して急ぐ必要はないと考えています。

(※) 25年もの長きにわたり、ワインと料理の著述に専念。代表作『ワインが分かる』は、世界中のワイン愛好家をうならせた名著。

ブルゴーニュへ、ようこそ

中世の歴史に息づいているブルゴーニュへようこそ。豊かな酒を飲み出すぶどう畑、グルバノスランの敷々、中世の建物の美しさ、美しい広大な大地や、小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

お問い合わせ
(株) 佐多商會 担当： 沼沢
Tel. 03 3582 5087

